

## はしがき

ここ二年あまり、アメリカのたばこ訴訟は目を見張るばかりの展開を見せた。最初四〇兆円の和解と聞いたときには、訴訟でこんなことができるのかと耳を疑ったが、その後も、今年（一九九九年）の三月には、喫煙者が一人で起こした訴訟で八〇億円の賠償が認められている。そんな訴訟が、継続中のものだけでもアメリカには一〇〇〇〇件近くあるという。この圧倒的な訴訟活動のエネルギーはどこから来るのだろうか。また、それはどのようなシナリオで、たばこ政策の未来を描こうとしているのだろうか。ひるがえって、日本でも、昨年、嫌煙権運動にかねてから取り組んできた弁護士と支援団体によって、喫煙による健康被害の賠償を求める訴訟が提起された。まだ始まったばかりでその去就は予測できないが、ここでも、訴訟という手段を使つてたばこ社会を根底から作り替えていこうとする壮大な試みがなされている。

こうした裁判を通して大きな政策目標を実現していこうとする訴訟活動のことを、私たち法社会学者は、「政策形成訴訟」として前から注目してきた。たばこ訴訟もその典型である。ただこれまでは、こうした訴訟について、政治の場では発言力を持たない者が訴訟の場に問題を持ち出し、世論を巻き込んで政策論争ができるという、政治学でいう「アジェンダ・セッティング」にその主たる機能を見いだしてきた。たしかに、この側面はたばこ訴訟の場合にもあり、マスコミを通じて法廷での議論が広く伝達され、実際、世論を喚起するという効果も得られている。しかし、日本で最初に嫌煙権訴訟が起こされ

た頃（一九八〇年）に比べて、たばこの健康被害に対する啓蒙ははるかに進んだし、アメリカでは、一九五四年の医務長官の報告書が出る前後から半世紀にわたって、たばこ産業と市民運動との執拗な戦いが続けられてきた。この二年間の劇的な訴訟展開もこの戦いの上にあるものだし、子細に見てみると、訴訟そのものも、政策形成というよりも、不法行為専門弁護士が弁護士サーピスのマーケットを開拓する途上で、たばこPL訴訟にたどり着いたというのが実態でもある。また、主要な訴訟で負けるたびに株価が急落するように、たばこ会社がこの訴訟攻勢を耐えられるか危ぶむ声も強い。訴訟は力なのである。

この訴訟を武器として戦われる政治的な葛藤を社会的な広がりの中で捉えることと並んで、たばこの問題を考えるには、意味論的な考察も欠くことはできない。喫煙の健康被害は、公害や薬害と違って、ある日突然罪のない者に降りかかってくるわけではない。どの程度深刻に受け止めたかは別にして、体に悪いということは必ず聞いているはずであるし、それにもかかわらず吸い続けた者が、今さらたばこ会社を訴えるということに多くの国民は素朴に疑問を感じるであろう。不十分な警告、ニコチンの中毒性、さらには積極的なたばこ販売、未成年時の喫煙習慣化等が、こうした自発的喫煙論を論破するためを持ち出されるが、「よい子」は未成年のときたばこを吸わないし、意志の強い人はたばこを吸っていても止めるといった意識が国民の中にあるかぎり、この反駁にもどこか胡散臭さがつきまといている。

実際、嫌煙権訴訟の頃は、喫煙者は、まわりの者の迷惑を顧みず煙を吹きかける、非喫煙者と対立する存在であった。その喫煙者が被害者となって、非喫煙者とともにたばこ会社を告発していくためには、しかし、「いけないと知りつつ、ついたばこに手を出す」意志の弱い人間として自らを提示しなければならず、それは、自らを独立した人格と見なす自己意識を決定的に傷つけることになる。「禁煙しよう

と思えば自分は止められる」と思うことが喫煙者の人格を支えているとするならば、止められない中毒者として喫煙者を描くたばこ訴訟には、喫煙者の実感と離れた、むしろ「たばこなどに手を出さない」どこまでも非喫煙者の論理に立った訴訟という面があるであろう。

こうした喫煙者の主体性、喫煙の意味づけそのものが訴訟において争われているとすれば、たばこ訴訟も、通常の政策形成を越えて、文化の次元でより深く読まれなければならない。本書が意図したのも、このたばこ訴訟の読解である。

母体となったのは、昨年の一月に京都で行ったシンポジウムである。アメリカのたばこ訴訟を詳しくフォローしてきたギャランター、シュガーマン両教授の報告に、伊佐山弁護士からの日本のたばこ訴訟についての報告、そして私を含め、佐藤岩夫、吉田邦彦教授の報告が行われた。それらを収録した他（吉田報告は、『ジュリスト』一一四九号に私の基調報告とともに掲載されたが、本書には入っていない）、当日シンポジウムに参加し、活発に討論に加わった者の中から寄稿を求めてもらったのが、本書である。論者の関心から多様な切り方がなされているが、丸一日かけたシンポジウム、そして、その後も緊密な意見交換を経て、相互に問題意識の共有が図られており、議論のつながりが感じられると思う。

最後になったが、本書の出版を快く引き受けて下さった世界思想社と、編集次長の秋山洋一さんならびに編集部の田中奈保生さんに、この場を借りてお礼を申し述べたい。

一九九九年九月

棚瀬孝雄